わたしの聖戦（ジハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 83

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

人間の限界

種類に限らず、アルコールに関するコマーシャルは多い。冷えたビールを飲み干したり、日本酒をちびりと口にしたり、ひとりでしみじみ、皆でワイワイ……、確かに他の商品に比べると、その種類やメーカーの多様さから、結構アルコール関連の情報やそそられ感は始終テレビを通じてお茶の間に浸透している。

それに対し、アルコール問題に取り組む団体から「テレビのアルコールCMの規制強化に関する要望書」が提出されたという。それを読むと、この種の規制がないのは先進国の中でも日本だけであること、女性や未成年者の飲酒が健康被害等の問題を引き起こしている事実を鑑みそれをあおるような内容については慎むべきであること、等々が理路整然と連ねられている。

かねてから日本はアルコールに甘い国だといわれてきたが、その健康被害は実は喫煙にひけを取らないのだといった論調やデータもちらほら目にするようにはなった。しかしどちらかといえば、健康云々というよりも一気飲みによる死亡や飲酒運転が引き起こす悲惨な事故によってアルコールの悲劇は表面化してきた。その種の、いわゆる劇的な「事件」ではなく、アルコールそのものが体を蝕んでいくことについては、相変わらず無頓着でありすぎた感は強いように思う。特に妊娠中の多量飲酒は胎児の知的障害や発育障害など、いわゆる「胎児性アルコール症候群」を引き起こすこと

また、アルコール依存症で人格も家庭も破壊された人々にだって接してきた。もちろん、アルコール等の複合的な要因がもとで肝臓疾患に苦しむケースも多い。しかし、思うに、やはり人間というものは「その身になってみないとわからない」動物であるのはほぼ間違いない。ふたりにひとりががんになる時代になっても、がんといわれない限りはどこまでも「ひとごと」である。がんだけでなく、あらゆる不幸は、わが身に降りかかってこない時点では関心が持てないように出来ている。が、逆にそうでなければ生きていけない。絶えず病気を心配し、事故に遭うことを恐れ、事件に巻き込まれるのを脅えつつ暮らすことなど不可能だ。不幸や病気は、遭遇しないうちは自分には関係ないこととして生活しているのが人間の性（さが）であり限界なのだと思う。

そういった原則からいえば、そんなに目くじら立てることだろうかと一瞬思うのが冒頭の「要望書」だろう。その種のことを言い出したらキリがない。交通事故で愛する人を亡くした人は車のCMを規制せよというのか？病気になって身動きできない人もいるのに、観光や旅行番組など放送するなと文句をいうのか？家族が殺人に巻き込まれた経験を持つ人もあるのだから、2時間ドラマの殺人場面は制限しなければいけないのか？……。

規制というのは難しい。様々な価値観が交差するなかで、結局最後には「経験したことしか人は理解できない」という人間の「限界」を思い知らされるばかりである。

イラスト・三浦義雄